

20 キウイフルーツ

(1) 生産目標

品種・系統	10a当たり収量	精果率	目標果実重	糖度
ヘイワード	2,500kg	90%以上	M果以上 (100g)	採収期 6.5~7.0以上

(2) 経営指標及び労働時間

経営指標 (10a 当たり)

項目	金額
① 出荷量 (kg)	2,250
② 販売単価 (円)	483
③ 粗収益 (円)	1,086,750
④ 経営費 (円)	905,292
⑤ 農業所得 (円)	181,458

※ 令和2年～令和5年の平均単価

ア 販売単価の推移

(単位: kg 当たり円)

年次	26	27	28	29	30	R1	R2	R3	R4	R5
単価	425	613	414	370	369	398	418	460	481	573

(H30 まで: 全農山口扱い、R1~: J A 山口県扱い)

イ 経営費の内訳

(単位: 10a 当たり円)

費用	金額	備考
肥料費	63,688	※ 雇用労賃は未計上 ※ 賃借料は選果及び冷蔵庫経費等 ※ 減価償却費は、単作又は他の果樹と組み合わせて150aの経営を想定し算出
農業薬剤費	36,268	
光熱動力費	13,248	
諸材料・小農具費	10,248	
賃借料・料金	230,000	
修理費	50,554	
減価償却費	273,631	
販売費用	209,543	
管理費用	18,200	
合計	905,292	

ウ 投下労働時間 (10a 当たり)

(ア) 月別労働時間

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
20.0	13.5	3.4	5.4	48.8	21.8	11.4	9.4	3.4	3.4	37.0	20.0	197.5

(イ) 作業別労働時間

整枝 せん定	施肥	土壌 管理	水管理	摘蕾 (果) 受粉	新梢 管理	防除	採収 出荷	計
60.0	8.0	5.5	20.0	40.0	15.0	14.0	35.0	197.5

(3) キウイフルーツ重点指導事項

事 項	推 進 内 容										
1 高品質果実の生産	<p>1 棚面管理の徹底</p> <p>過繁茂は低糖度、貯蔵中の早期軟化、病害発生のみならず、母枝の充実不良ひいては、翌年の生産不安定へと結びつく。したがって、棚面新梢管理を徹底し、夏期棚下相対照度を5%程度には保つ（棚下の木漏れ日1割程度）。</p> <p>(1) 夏期不要枝（徒長枝等）のかぎ取り、遅伸び枝の摘心、切り返し、強勢枝の切り返し。</p> <p>枝梢構成（1㎡当たり）</p> <table border="0" style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>結果母枝数</td> <td>3本</td> </tr> <tr> <td>芽数</td> <td>15～20芽</td> </tr> <tr> <td>結果枝数</td> <td>9～11本</td> </tr> <tr> <td>新梢数</td> <td>11～12本</td> </tr> <tr> <td>着果数</td> <td>25～30個</td> </tr> </table> <p>2 早期摘蕾、摘果と着果調節</p> <p>早期の摘蕾、摘果により大果を生産するとともに着果量を調節し、高糖度果とする。</p>	結果母枝数	3本	芽数	15～20芽	結果枝数	9～11本	新梢数	11～12本	着果数	25～30個
結果母枝数	3本										
芽数	15～20芽										
結果枝数	9～11本										
新梢数	11～12本										
着果数	25～30個										
2. 花腐細菌病対策	<p>1 耕種的防除の徹底</p> <p>(1) 過繁茂にならないようにする。（新梢管理）</p> <p>(2) 園内の通風や採光を良くするように園地環境を改善する。</p> <p>(3) 施肥改善や縮間伐を行い好適な樹相に改善する。</p> <p>(4) 環状はく皮は効果があるが、処理時期を誤らないことと樹勢が衰えないように注意して行う。また、かいよう病等の細菌病の伝染を助長するので注意する。</p> <p>2 薬剤防除</p> <p>発芽前散布と生育期(4～5月)に定期的に防除を行う。ただし、薬剤散布だけでは効果不十分なので、上記耕種的防除と合わせて行う。</p>										
3. 土づくり	<p>1 水田転換園では特に排水をよくし、有効土層40～50cm以上になるよう塹壕式改良をする。</p> <p>2 土壌pH6.0～6.5が好適酸度であるので調査し適正石灰量を施用する。</p> <p>3 有機物、完熟堆肥を10アール当たり1～2t施用し土づくりをする。</p>										

(4) キウイフルーツ作業

月	旬	生育状況	作業名	作業の内容
1月		休眠期	棚の補修 防風施設の整備 接木	棚張線の締め、支柱の補強を行う。 新梢の折損、傷葉果等の風害を受け易いので防風垣の設置や補強する。 溢液期になる前の1月中に行う。
2月		溢液期	苗木の春植え	2月下旬～3月上旬が適期、排水と深植えに注意する。
3月	上～下	発芽期	春肥施用	年間施肥量の20%(N)位施す。
4月	上～中	展葉期 新梢伸長期	晩霜対策 芽かき 環状はく皮	新梢が5～8cm位伸びた頃が適期であり、夏季まで随時行う。1㎡当り新梢数10～12本程度確保する。 花腐細菌病多発樹では、開花約1ヶ月前に5mm幅で地際から60～150cmの主幹部に施す。
5月	上～中～下	開花期	新梢の誘引・ねん枝 摘蕾 (摘花) 人工受粉 夏肥施用	直立の結果枝等は突風で折れやすいので5月から基部を捻枝して、枝の重なりをさけ、枝の間隔を保つように誘引する。 側蕾、奇形蕾、短果枝の蕾、傷害蕾等を摘除し、その後1㎡当り35～40蕾位に調整する。 (1㎡30～35花に調整する。) 採薬は開花直前の正常な花をとり、開薬は温度20～25℃、湿度50%で行う。受粉は晴天、無風の日に進行。花粉は受粉直前に石松子で10～20倍に希釈し使用する。 年間施用量の20%位、樹勢を見て施す。

6月	上 中 下	果実肥大盛期 結果枝伸長 停止期	摘 新梢の摘心・誘引 排水対策 夏季せん定	果 策 定	摘果は果実の形が確認できる頃(落花後約2週間後)から行い、葉果比6(1㎡当り25~30果)とする。 生育の強い新梢の基部を捻枝し誘引する。新梢の先端部が巻き付き始めたら摘心を実施し、過繁茂にならないように新梢を配置する。 梅雨期の停滞水は特に注意する。 棚面の日照不足は落葉、果実品質の低下につながるので不用枝は間引きする。樹間内にこもれ日が入るようにする。 良質花粉を得るため、雄木についても過繁茂にならないように新梢管理をする。	
7月	上 ~ 下	花芽分化始	敷 仕上げ か	ワ 摘 果 水	ラ 果 水	土壌水分保持のため、除草し、畝を主体に敷ワラをする。 小玉果、局所の結果過多など、見落とし部分のないように全体の結実を調整する。 梅雨明け後7~10日から、早めに適正かん水する。
8月	上 ~ 下	新梢伸長期	台 枝 の	風 整 理	対 策 用	防風垣の補修や棚の補強など事前に行う。 棚面の日照を確保するよう重なり枝、徒長枝、巻枝等をせん除、または摘心する。
9月		果実充実期	排 水 対 策	対 策 用	策 用	秋雨による湿害を防ぐため溝を掘り上げるなど行う。
10月			秋 肥 施 用	施 用	用	年間の施用量の20%位施す。
11月	上 ~ 下	果実成熟期	収 貯 追 元	穫 蔵 熟 肥	期 蔵 用 用	糖度6.5~7.0以上で収穫を開始する。午前中の気温の上がらないうちに採取、日陰におく。 傷果、病虫害被害果、日焼け果、奇形果、偏平果を選別する。 短期の貯蔵には常温貯蔵庫で2~3ヵ月、中期貯蔵では貯蔵温度5℃で4~5ヵ月、長期貯蔵では、1~2℃で6~7ヵ月の貯蔵が可能。ポリフィルムで果実を包み湿度90~95%で行う。 低温貯蔵庫で貯蔵すると追熟を遅らせることができる。 年間施用量の40%位施す。
~ 12月	上	落葉期 休眠期	苗 整 枝	木 せ ん 定	植 え 定	植栽距離6×5mとする。排水を徹底し深植えをしない。 基本樹形は、2本主枝の一字仕立てとする。長さ1m程度の結果母枝3本/㎡を配置し、側枝の3年以上のものは更新する。1月末までにやり終える。

(5) 施肥基準

ア キウイフルーツ（成木）10a 当たり施用量

施肥時期	時期別割合 (%)			成分量 (kg)			施肥上の注意
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
元肥 (11月中旬)	40	60	50	8.0	9.6	9.0	(1) 成木園10a当たり収量2,500kgを基準とする。 (2) 堆肥、稲わらなど有機物資材を1t以上施用する。 (3) 10a当たり栽植本数を30本程度とする。
春肥 (3月上旬)	20	—	—	4.0	—	—	
夏肥 (5月下旬)	20	—	20	4.0	—	3.6	
秋肥 (9月上旬)	20	40	30	4.0	6.4	5.4	
計	100	100	100	20.0	16.0	18.0	

イ キウイフルーツ（幼木）10a 当たり樹齢別施用成分量 (kg)

樹齢	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥上の注意
未結果樹	10	7	9	
結果若木	15	12	14	

(6) キウイフルーツ品種特性表

品種・系統名	原産地及び来歴	果実の特性	樹の特性	栽培上の注意事項	収穫期
ヘイワード	ニュージーランド種苗園主ヘイワード・R・ライト氏1920年発見 偶発実生 1930年 紹介	果実は大きく100g程度、果形は広楕円形で扁平なものが多い。 花は大きく花弁基部は互いに重り、花柱は曲がり強い。 果肉は緑白色を呈し、甘味、酸味のバランスがよく品質的には良い。また貯蔵性は特にすぐれている。	樹勢はやや弱く、樹冠の広がりはやや少ない。 成葉は大きく、濃い。 葉身表面の凸凹が強い。		11月上旬
東京ゴールド	東京都小平市の中村康記氏発見 平成25年7月 品種登録	果実は100g程度、果形は楕円で果実中央部の横断面の形は扁円、果頂部の形は部分的にやや尖る。 1花穂中の花蕾数は中、花の直径はやや大、花弁の主な色は白、 果肉は黄色、糖度が高く酸味が低く、多汁で風味、食味とも良好。	樹勢は弱く、熟梢の太さは太い、葉身の形は広卵形で、葉身表面の緑色の濃淡は中、葉柄の相対長(葉柄長/葉身長)はかなり大きい。	花穂の数が多く、放任では着果数が多くなり過ぎて、果実が大きくなりくいいため、着果数を適正に管理する。	10月中旬から下旬